

# おしも井戸

今から一二〇〇年ほど前のことです。

諸国しよこくを旅しているお坊ぼくさんが、ある夏の日の夕方ゆふがた、刈谷かりやの熊村くまにやってきました。急ぐ旅ではないので、この村で宿やどを借りかりようとしたお坊さんは、畑はたけで働いている村人に一夜の宿をたのみました。ところが、村人たちは、破やぶれほうだいの衣を着たお坊さんの姿を見るなり、

「畑にまいた、おく豆の手入れでいそがしくてなあ。」

と、みすぼらしい旅のお坊さんのいうことなどには、耳を貸かそうとしません。

「ここら辺りは、蚊かがえらくてなあ、おらあとこには、蚊帳かやがにやあのでのう。よそで聞いとくれん。」  
（多くて）

といて、ことわる人もいます。だんだん日がくれてくるのに、宿が見つかりません。すっかり困りぬいたお坊さんは、

「熊村に蚊あおれ、おく豆なるな。」

と、ひとりごとをいいながら、しかたなく熊村を立ち去りました。

日がすっかり傾かたむいたころ、旅のお坊さんは、舟で向こう岸の大府村おおふの南島みなしまに渡りま  
した。ここでも、一軒一軒訪ねて一晩の宿をたのみましたが、旅のお坊さんの姿すがたを見



ると、だれもとめてはくれません。こうなつたら、野宿のじゆくをするか、危険きけんを覚悟かくごで旅を続けるかと考かんえているうちに、村はずれまでできてしまいました。いよいよ夕やみがせまつてきます。宿しゆくを探さがすのをあきらめかけたとき、一軒いっけんのあばら家やが目にとまりました。明かりはついていませんが、人は住すんでいるようです。

「ごめんください。ごめんください。」

と、旅のお坊さんは、破れ戸を遠りよがちにたたきました。

「はい、はい。どなたですか。」

といいながら、くぐり戸を開けて、こしの曲まがつたおばあさんが顔をのぞかせました。「旅の者ですが、日がくれても宿がなくて困まどっています。なんとか今夜一晩、とめてくださいらんか。」

と、旅のお坊さんは、こしを低くしてたのみました。事情じじょうを聞いたおばあさんは、「それは、それは、なんぎなさいましたのう。こんなあばら家やで、なんのおかまいもできやせんが、それでよけりやあ、遠慮えんりよのうどうぞ、どうぞ。」  
（へもてなし）

と目をしょぼつかせながら、こころよく引き受けました。

「わしの家には蚊帳ぶんぢやうがないもんで、代わりにごをたくで、けむてやあけど、ちよつとしんぼうしてくださいや。」

とことわって、おばあさんは、松の落ち葉をたいて、その煙で蚊を追い出しにかかりました。追い出しをしたら雨戸をしめてしまうのです。

それを聞くと、お坊さんは、

「いや、いや。今夜は、蚊は出ませんよ。」

と、笑い顔でいきました。不思議なことに、その夜は、蚊が一ぴきも出ませんでした。その晩、ふたりは、いろいろ話をしました。お坊さんは、おばあさんがしもという名前であること、目の病気にかかっていることを知りました。また、この辺りは海岸ばたで、清水にも井戸水にも恵まれてないこともわかりました。

あくる朝のことです。家の外へ出たお坊さんは、おばあさんと呼んで、

「おしもさん、昨夜はとまるどころに困っていたわたしを、よう助けてくれました。

おかげで夜露にぬれなくてすみしました。ありがとうございます。」

というと、手に持っていたつえを念仏を唱えながら地面に突き立てました。お坊さんがつえを地面からぬくと、不思議なことにそこから清水がどんどんわき出てくるではありませんか。

「さ、さ、おしもさん。この水で目を洗いなされ。」

というお坊さんのすすめるままに、おばあさんは目を洗いました。清水が目に入るに

したがって、外の景色がはつきり見えてきました。長い間苦しんでいた目の病気がなおったようです。

お坊さんは、

「この清水は、わたしからのお礼です。自由に使ってください。それじゃあ、元気でな。」

といって、また、旅に向かわれました。おばあさんは、立ち去るお坊さんの姿をしっかりと見ることができました。

「もしか、あのお方は、弘法さま……。」

というなり、おばあさんは、その場にぺたんこ座りこんでしまいました。そして、いつまでもお坊さんの後ろ姿に手を合わせていました。

それ以来、この清水の出るところを「おしも井戸」と呼んで、村人はもちろん、行き来する人たちも、もらい水に来るようになりました。

大府地区に伝わる話です。「おしも井戸」は、朝日町二丁目の交差点北側にあります。

弘法大師は、高野山に寺を建てて真言宗を開き、人々のために仏教を広めました。そのほかに、農業用の池をつくって人々のために力をつくしました。そのため、弘法大師の掘った井戸とか、築いた土手だとかいう伝説が、各地に残っています。